

「結婚」(前半)(翻訳) “A Marriage” (The First Half) (Translation)

坂 淳一 Junichi SAKA 訳

メアリー・ラヴィン Mary Lavin 著

敷地内の車道を半分ほど行ったところに、クラブアップルの木がいくつもある。その下でスパニエルの老犬が待っているのを確認すると、ジェイムズはギアをローに落としした。最近毎晩のように、こんなふうにして車の速度を落としやる。まだまだ車には負けないという、その犬の思い込みをこわしたくなかったからである。

かつてはこの犬も、ジェイムズが公道を走ってくる音を聞きつけると、表門のところまで来て伏せの体勢をして待ち構えていたものだ。主人の帰宅を喜んで気も狂わんばかりに吠えだすのを聞いて、ジェイムズもどれほどの喜びを感じていたことか。

大学で丸一日あくせく働いた後で、ダブリンから車で帰ってくるのは長くつらい道のりであった。もつとも、同僚にはつらいなどと認めたことはない。農場の門にたどりつき、もうすぐ自分の牧草地の真ん中に立つのだと思ったときの満足感からすれば、そんな苦労は何でもないと言っていたのである。満天の星に抱かれて、仕切りさえない広大な放牧場に立ってれば、いらだつた神経もたちまち癒される。起伏のないミッドランド地方では、まるで海辺にいるときに、天空が大地を包み込んでいるのを実感できるのだ。表門を閉め、車にもどり、澄みきった空気を深々と吸い込むと、さあ来いとばかりにスパニエル犬の方に全神経を集中する。放牧場と家の周りの庭を仕切る内門までどちらが先に行き着くか、いつも気合十分で犬と競争するのである。

この犬も、若かった時分には車の横をまるでツバメが飛ぶように疾走し、ぴんと立てた尻尾は軍旗のように風になびかせていた。クラクシオンを鳴らし続けて牛たちを道から追い払う必要もあった。今では、この大きな動物たちは、群れの中を車がのろのろ進んで行ってもほとんど関心も示さない。ほんの少し顔を上げるだけで、すぐにまた平然と草を食べ始めるのだ。

ところがその夜は巨大な雄牛が道の真中に立っていて、この牛が他の牛たちに続いて重々しく去ってゆくまでバンパーで小突いてやらねばならなかった。牛がいなくなっても、彼は依然としてカタツムリのような速度で進み、すぐに疲れる犬が活力を取り戻

し、車の数ヤード前を進んでゆけるようになっていた。

かわいそうに、この犬もだいたいお年を取ってしまったのである。安楽死させてやる日も遠くはないだろう。心のうちに大きな悲しみを感じながらも、この老犬がまだなかなか抜け目ないところがあるのを見て微笑まずにはいられなかった。ひき殺してしまいうそで追い抜けないとわかっていて、わざと車の真前を進んでゆくのだ。「いい子だ」と言っただけでやると、老犬は恐る恐る顔を上げ、勝ったのはわたしですよと、しょぼしょぼした目で訴えてくる。その目の中には、主人を打ち負かしてしまった罪悪感のようなものさえ浮かんでいる。

彼らが内門に到着し、車道が終わって玄関前の広々とした砂利敷きのところまで来ると、ここならもう車を一人で車庫まで行かせても自分の不名誉にはならないと見定めたのだろう、犬は荒い息をしながら手足を投げ出してのびてしまった。

先導する犬に邪魔されなくなったので、ジェイムズは家の勝手口の方へ素早く車を回した。エミーが外を見て手を振っているといけないと思いつき、台所の窓を通りがかりに眺めてみた。しかし台所の窓は蒸気で曇っていて、中はまったく見えない。彼女はおそらく家の反対側について、小さな書斎にあるテーブルをセツトしているのだろう。一番下の子供も大きくなって家を離れたので、彼らは普段その部屋で食事をしていたのである。

車庫の中で、ジェイムズは助手席からかばんを取り、後部座席に手を伸ばして村の店から持ってきた広告の束をつかもうとした。彼らがこの片田舎に引っ越してきてからというもの、彼は毎晩エミーのために、来る日も来る日もこの広告を取ってこなくてはならなかった。しかし今夜は、荷物に邪魔されずに手足を伸ばし、家に入る前に夜の冷たい空気をもう少し吸いたいという気持ちが強かったので、鞆だけ手にして広告はそのままにしておいた。そのうち緊急に必要なものできたら、その時に取りに行く

所属
准教授

ればよいのである。疲れた頭で、家にある自分の書斎の机を思い浮かべた。大学にある自分の机よりも散らかっている。こまごました物を整理し、仕分けしてしまい込んでくれる秘書がここにはいないからである。一日中留守にしているにも関わらず、ここでも電話にわずらわされれないでは済まない。彼にかかってきた電話はエミーがすべて受けて、名前と電話番号を書きとめ、戻ったら電話させますと言っていたからだ。おそらくは、農場で働かせている農夫の誰かが、帰りがけにやり残すことにした仕事について、彼あてに鉛筆で走り書きしたメモもたくさんあるだろう。これもジエームズが片付けなければならぬことが多い。また例外なく、エミー自身が彼のために山ほどの雑用を用意してくれていた。やれヒューズを交換してくれだの、排水溝が詰まっただの、引き出しがガタガタだのといったことである。何をやれと言われるか分かったものではない。この夜は特に疲れていたからか、彼の脳裏には意地の悪い考えばかりがよぎった。エミーがいつもきっかり同じ時間に夕食を用意するようにしているのは、彼女が自分にやらせようとしている用事をきちんと片付けられるように、時間をたつぷり確保するためではないだろうか。急を要することに対処するのが嫌だというわけでもないし、どうということもない暇つぶし仕事で、さして必要性もない作業をのんびりやるのも悪くはない。寝るまでかかるほどの用事でなければ別にかまわない。エミーがいつも用意してくれる食事の素晴らしさを思えば、そんなことを考えるのは恩知らずというものだ。ただ、今着いたばかりだというのに、まるで隠れ家に逃げこむように家に入り、日没前の最後の貴重な時間を逃し、自分の土地が与えてくれるものをじっくり味わう時間を失ってしまうのはあまりに惜しい。土曜日と日曜日を除けば、彼は日の出から日没まで壁に囲まれて暮らしており、例外といえはただ家から車に向かう時と、車から研究室に向かう時だけで、昼休みでさえほとんど研究室から出ることもなく、ただ生協の地下にある自動販売機のところまでサンドイッチと紙コップ入りのコーヒーを買いに行くだけであった。そして一日が終わって自由になると、研究室から車へ、車から家へ、

そして家からベッドの中へと逆にたどるだけである。どうせこんなものだ。彼はゆっくりと車から出た。運転の後なので、足が棒のようになっている。もう一度、すっかり結露した台所の窓を見てみた。外はからりとした天気だというのに、窓ガラスの内側には水滴が流れ落ちていた。つぎにエミーの車が目にとまった。最近彼女が車に乗って出かけたときに停めたままの場所にある。でたらめな停め方で、片方のタイヤが芝生のはじに乗っかっているのを見て、彼は腹が立った。きちんと停めなくちゃだめじゃないか。芝生のふちがだめになってしまう。自分では直さないと断るうな、絶対に。彼は鞆を下して、すぐに自分で車を停め直そうかと考えた。しかし、その辺に鞆を放置しておくのもやりつけないせいか妙に不安な感じがしたので、玄関のドアを開けて中のテーブルに置いてくることにした。鍵穴に鍵を差し込んでるとき、自分なるべく音を立てないようにしていることに気づいて、ジエームズは驚いた。まるでこそドロのようである。そして、はっきり意識していたわけではないが、病室のドアを閉めるようにそっとドアを閉じた。またその時になって気づいたのだが、もはや妻の車を停め直そうという気はなくなっており、ただパドックのフェンスのところまで行って、少しそこに寄りかかっていただけなのであった。昔、子供たちのポニーが草を食んでいたそのパドックも、今ではもうほとんど使われていない。始めは車を停めるのにかかるくらいの時間をそこで過ごそうと思っただけすぎなかつたが、視線がパドックを超え、彼の地所の北西方向の境界線を画し、ポイン川の支流にあたるきれいな小川との境目にもなっている若いブナの森にまで及んだとき、彼はそれまでになかったほどこの景色に心をうばわれてしまった。木々の上の方の細枝は、夕日の中で絡み合っており、まるでまゆ玉のようだ。それは神々しいまでの光景で、彼のささやかな逃避行を祝福しているようにも見えた。この時には、自分は最初に考えていたよりも少し長く外にいようとしていることに気づいていた。フェンスを乗り越えて森のところまで行こう、あるいは少なくとも新緑の若葉が淡い桃色の葉鞘を破り、その葉を広げ始めているかどうかが見えるとこ

までは行こう。エミーはきっと分かってくれるだろう。ひよっとして運が良ければ、彼女は車が近づいてくる音を聞かなかったかもしれない。しかし今フェンスのところまで来てみると、彼はもはや自分の足が砂利の上で大きな音を立てるのも気に留めなくなっていた。するとその時、彼は飛び上るほど驚いた。家からではなく庭の方からエミーが現れたのである。

「ジェイムズ！わたし、車の音が聞こえなかったの。」彼女が申し訳なさそうに言うので、彼はなんだか自分が悪いことをしているような気がした。彼女は腕にガーデン用の木のかごを下げていて、そこには丸いアーティチョークがいっぱい入っていた。彼女はそれを手にとって彼に見せた。「こんなに見事なの見たことある、ジェイムズ？紫と緑の絶妙な取り合わせでしょう。これまで栽培してきた全部緑色とは種類も違うのよ。これはもつと水分が多いの。とつてもきれいでしょ？これを見てると、パリでもうちよつとで買うところだった、あの磁器で出来たアーティチョークを思い出すわ。」ここで彼女は急に話を止めた。「何年も前よ。あなた覚えてる？」

妙なことに、二人してのどから手が出るほど欲しくなってしまったあのかわいらしい装飾品のことを、実際彼も思い出していた。最終的には値段が高すぎると彼が判断した、あの装飾品。今、彼女が口にするよりも前に、ベトゥヌ河岸の彼らのホテル近くにあった店のショー・ウィンドウで、その装飾品のことをじつと見つめていた光景を、彼ははっきりと思い描いていた。その時、彼とエミーは新婚旅行の最中であった。彼女はそのことを忘れてしまったのだろうか？もつと後で行った別の旅行の出来事だと思っていたのか？しかし理由はわからないが、彼女はちゃんと覚えていてと彼は感じていた。彼女は、まるで何か別のことを言いかけたかのように、文の途中で妙な具合に言葉を途切れさせた。もしそうだとしたら、彼女もなかなか如才ないところを見せてくれたわけで、それは彼にもありがたかった。先ほどから、彼は彼女のことをもつとよく思いたいと心から願っていた。しかし、彼女が自分の見かけに信じがたいほど無頓着なせいで、それも容易では

ない。彼女は毎晩同じ格好だが、今夜もガーデンング用の古いスカートを履いていて、髪はいい加減に結び上げて首筋のところでお団子になっており、その両側にいく筋もの髪の毛が飛び出している。そんなふうには髪を無造作にあつかうのも、かつてはとても魅力的だった。だが今では白いものも増えてきているし、髪型を何とかする努力も絶対に必要だ。彼はいつでも、自然が一番という彼女の信念を尊重し、共有してきた。しかし、彼女も年を取ってきたのだし、人並みに自分の外観をどうにかした方がよいに決まっている。彼女の髪は灰色の筋が多くなっており、そこに灰色の服と灰色のカーディガンを合わせると、人間の女性というよりまるで鳩のようであった。しかしここまできて、若かった頃の彼女の髪がどれほど美しかったかを思い起こし、彼の胸は締めつけられるように痛んだ。あの濡れ羽色の黒髪！誰もがいつもその髪をほめちぎっていたものである。もつとも、ありきたりなお世辞ばかり聞かされるので、彼は始終カリカリしていたのだが。ただ真つ黒というのは、染めた髪だけに見られる特徴である。エミーの髪は、まさに烏の羽のような黒さであり、そこには青や碧の光があり、金色の輝きさえ見られるときがあった。ジェイムズはため息をついて、アーティチョークの方に気持ちを切り替えた。「これは見事だね、エミー」と彼は心から言ったが、エミーの方は茎の部分にナメクジを見つけて、自分がした質問のことも忘れていた。彼は手を伸ばして彼女の手からかごを取り、ナメクジの方は捨ててしまいたいと思ったが、そのアーティチョークには本当に感心していたのである。ほめるつもりで「来年、トリムの農業祭に出してみるといいな」と彼は言った。気のせいなのか、彼女の顔が一瞬曇った。おそらく彼女は、ここ数年の間に育ててきた果物や花のことを考えていたのだろう。彼はそれをわざわざほめることもなかったし、ましてや品評会に出したらなどと言ったこともない。あのとても小さな水仙や、ミニバラや、シシリンキウム・ストリアツムのような珍しい花など。これは彼女の手にかかると雑草みたいによく生えた。それに言うまでもないが、このアーティチョークのような野菜の数々。頑張つて育てたものの、結局地元

の人たちにお裾分けするはかなくなつたが、この人たちはキャベツとカブしか喜ばなかつた。何か彼女が喜ぶようなことを言つてあげようと考えていたら、彼女はそのナメクジを自分の手のひらにふるい落としした。

「まあ、ジェイムズ！見て。このナメクジ、私にむかつて角を出しているわ」彼女は小さな生き物にすっかり気持ちをやうばわれていた。しかし彼がそのナメクジを自分の手にとつてよく見てもみようと言ふと、彼女は後ずさりした。「あなたは興味ないんでしょう」と言い、驚いたことに目には涙さえ浮かべている。彼女はあわてて目をしばたいてごまかした。最近の彼女は本当に予測がつかない。彼は足元のスパニエル犬を見下ろした。犬は彼の足元でのびていたが、目のふちまで愛情に満ちた眼差しで彼を見上げている。彼はなんだか落ち着かなくなつた。これまでも増して、彼はしばらく一人でいたくなつた。

「エミー、夕食前に少しぶらぶらしてくる時間はあるかな？」と彼はたずねた。それを聞いてエミーが驚くかどうかは、もはや気にもかけていなかった。日没前の最後の夕陽を楽しむと心に決めていたのである。

「具合でも悪いの？」と彼女は心配そうな顔で見ながら言った。彼女は再びアーティチョークを持ちあげた。「これは明日の晩食べるのよ。今夜じゃないわ」と彼女は言ったが、明らかにそれは彼女がまだ料理に時間がかかると勘違いされなためであつた。彼が、大丈夫、ただ少し外の空気を吸っていただけだと言つと、驚いたことに彼女はかごを地面に下ろした。

「私も行っていい？」と彼女は言った。「この間から、あなたに言ひなかつたことがあるの。家から出る前にガスの火は消しておいたから、何かが燃える心配はないわ。急いで行けば、ちよつとした散歩の時間くらいじゅうぶんあるわよ」

「いいとも」と、ジェイムズは同意するはかになかつた。陽の光はどんどん弱くなつてきていた。目指す小さな森の中では木々が青い霧に包まれていて、それは遠くにたちこめる霧と同じくらい深い色だつた。一本の背の高い針葉樹の先端だけが、黄金色に

輝いている。

「急いだ方がいいわ」とエミーは言つて、彼の腕を取り、庭の方に向きなおつた。ジェイムズはきつぱりと腕を振り払い、フェンスをまたいでから彼女の方に手を差し伸べた。

驚いて、エミーは立ちつくして彼を見つめた。「どうしてそっちに行くの？霜よけの一つがね、ガラスが一枚取れちゃつたのよ。今夜そのサイズを測つておけば——そうそう、ここに巻尺もあるんだけど——明日、あなたが街に行った時に、新しいのを切つてもらつてくることも出来るかなと思つただけ」

何とはなしに、ジェイムズは本当にそれが彼女の言ひなかつたことなのかいぶかしく思つた。もしそうならば、今はそんなことにわざわざわされたくはない。「いいかい、エミー、私はもう何週間も森に行つていないんだ。今夜はぜひ行きたいと思つている。遠すぎると感じるなら君は来なくてもいいよ」彼女はためらつていたが、それもほんの少しの間だけであつた。彼女は彼の手を借りてフェンスを越えた。

「言つとくけど、あまり見ている時間はないと思うわよ」と彼女は言つた。野原に出ると、草が伸びているので枕地を一行で進まねばならなかつたが、彼女は次第に勢いがついてきて、彼の背中をつついてせかせかせた。「もつと速く、ジェイムズ。私思い出したわ。あなたに言おうと思つて忘れてたんだけど。もしまだ明りがあれば、どの程度の被害があつたか調べられるわ」背の高い草の中を歩くことになるというのに、彼女は彼の横に来て並んで歩いた。「農夫たちの話だと、うちの野原に枝がいつぱい落ちたんですつて。集めて庭まで引つ張つていったらいいと思うの。そして切つたり割つたりして薪にできるでしょう？」彼女はだんだん気がせいできて、ついに彼を追い抜き、ほとんど走り出さんばかりの勢いになつた。それから突然立ち止り、彼の方に向き直つた。「ああ、ジェイムズ。考えてみると残念よね。だって……」ジェイムズはこわばつた。訪問客があるといつも彼女が始めるあの憂うつな恨み節を、まさか自分相手に今始めようというので

はないだろうな？しかし彼の心配もどこ吹く風で、彼女は得々と話し続けた。「本当に残念だわ」と、彼女はため息をついた。彼はその先を聞かなくてすむように、一つ咳ばらいをした。

もう何年も前のことである。二人がこの土地を買おうかと最初に考えたときのことだった。その頃はまだ家も建っておらず、だからに川まで下ってゆくその森も、この地所の一部だという印象を二人とも持っていたのである。この森一帯が実は隣の地所に属していたというのは、二人にはなんともつらい後悔のたねであった。せつこの憩いの場が手に入らないというだけではない。この森が手に入らず、したがって小川にも近づけないとしたら、実際的にもいろいろな点で不都合だということがジェイムズには分かっていた。それでもやはり、彼はその地所を購入する手続きを済ませ、そこに家を建てる計画を進めていった。その時点でもなお、いずれは森を買い取ることが出来ると思い込んでいたのだろう。しかし隣の地所は法定相続人が決まっておらず、その相続者は未成年の被後見人で、エミーや彼よりは長生きしそうであったし、少なくとも二人があきらめるよりも前に死ぬことはなさそうだった。この場所を訪れるたびに、彼らは自分達の失ったものを嘆き悲しんだ。いずれにせよ、その地所は買ってしまったのである。彼は脳の中枢部からこの喪失感をたたき出すべく努力した。しかしエミーの後悔の念は、森の中の空き地からきれいに雑草を取りはらい、代わりにブルーベルや自生するアネモネをいっぱいにしたいというロマンティックな考えに基づいており、その喪失感が消え去ることはなかった。そのせいで、彼の喪失感も消し去ることができなかった。

二人が森に近づくにつれて、木が倒れたというエミーの話が正しかったということがわかった。たくさんの大枝が野原に散乱している。しかし枝が薪として使えると考えた点では、彼女は間違っていた。枝は水浸しになって腐っていたのだ。だからといって、そのまましておいていいわけでもない。運んで捨ててしまわなくてはならないだろう。彼はぼさぼさの生垣の向こうを見ようと背伸びをした。森の中には、他にも倒れた木がいっぱいある

と思ったのである。もつとも、どこもかしこも荒れ放題なので、あまりよく見えなかった。

「また管理者の人たちに手紙を書かなきゃだめよ、ジェイムズ」とエミーは言った。

「そんなことをしてもたいして意味はないよ、君もわかっているだろう？」と彼はいらいらしながら答えた。「どうせこの管財人に手紙を転送するだけだろうし、管財人が何もしないのは知れたことじゃないか！」ジェイムズはぶつきらぼうな態度にならずにはいられなかった。彼自身も大いに落胆していたからである。森はまさに湿地へと変わろうとしていた。そうなるネズミは増えるし、アブの大群も発生する。彼は苦勞しながら土手をよじ登り、その向こうの荒れ放題の状況をどうにか見てとった。思ったとおりだ。少なくとも五、六本の木が倒れ、他の木々の腐った幹の間に横たわっている。ここ数年の間に風に吹き倒され、そのまま放置されていたのだ。死んだまま立っている木々にしても、ねばねばした地衣類におおわれていて、気持ちの悪いキノコが生えている。あれではあらゆる害虫の温床になるだろう。シラミがわく、と思つてジェイムズは身震いした。薄暮はまたたく間に夕闇へと移ろいつつあったが、目が暗さに慣れてくると、生垣のすぐ下にあるひどく痛んだ木の樹皮の上で、何やらぞつとするような芋虫が、まるで交尾でもしているようにとぐるを巻いてもどもぞと蠢うごめいていた。見てみるまでもなく、彼にはとうにわかっていたのだ。ずっと下の小川に近い所では、長い間死体となって横たわっている木々の硬直した手足が、自生した若木のたくましい枝にこすられて皮がはがれ、たとえ暗くなっても病的に白い光を放ち、まだ生きていて青々とした若木の枝の又にも永遠にはさまれているのだと。

「ジェイムズ」とエミーは下から呼びかけた。「少なくとも土手のこちら側に生えているイバラを刈り取っておくことくらいはできるんじゃない？やっておきましょうよ。」

ジェイムズは顔をしかめた。今回も彼女の言うことは確かに正しい。生垣のこちら側をきれいにしておくことは必要だ。彼の気

にさわることに限って、エミーはやけに熱心になる。彼は土手から飛び降りた。

「それはやめておこう」と彼は言った。「このイバラがあれば、ともかくあのぞつとするような景色を見ないですむんだから。さあ、家に帰ろう。」彼は口笛を吹いて犬を呼んだ。「どこに行ったのかな?」

「どこだと思う? きつと川の方よ。泥だらけになって上がってくるわよ」エミーはどうやら彼の無愛想な態度にへそを曲げたようだ。

実際に犬が現れてみると、ひと目見て、川の中はおろか、そのそばへさえ行かなかったことがわかった。彼は犬の頭を軽くたたいてやった。それから、よたよた歩く犬を後に従えて、彼らは家路についた。空気は冷たく、すでに真っ暗であった。家に近づく、ジェイムズは本能的に玄関ドアの鍵を取り出した。

「裏から入ればいいじゃない」エミーは大股で勝手口の方へ歩いていった。あわててジェイムズは彼女の後を追ったが、二人がドアのところまで来たと思ったら、スパニエル犬がたどたどしい足取りで彼らより先に家の中に入ろうとしていた。エミーはさかさず足を突き出し、その行く手をさえぎろうとした。しかし時すでに遅く、老犬は体を傾けてすり抜けた。「こら、こら、こら」と彼女は言った。

「別にいいじゃないか。川にも入らなかつたんだし」とジェイムズは抗議するように言った。それから彼は自分の足を見下ろして、靴が夜露でぬれていることに気づいた。毛足の長いあの犬の手足もきつとびっしょりだろう。実際、ホールのタイル張りの床にはべたべたと足跡がついていた。ジェイムズからすれば、この見慣れた肉球の跡は無条件にかわいかった。どうせすぐに乾くさ。そうでなくてもモップでさつとひと拭きすれば済むことだ。なぜエミーはそんな大騒ぎをしなくてはいけないのか。彼女が腹を立てているのは、本当はその老犬が夜中に外に出してもらおうとしてクワンクワン鳴いて、彼女を起こすようになったからではないかと彼は考えた。このところ、彼女はそのことで文句を言ってい

たのだ。おそらく、今日、この場できちんと話しをした方がよいのだろう。しかしエミーはすでに台所に飛び込み、モップをつかんできて床を攻撃し始めていた。彼は彼女からモップを取り上げたが、彼女は収まりがつかなかった。彼女は唇を真一文字に結んだまま台所に戻ると、今度は居並ぶなべ類と格闘し始めた。彼女が言うところのデイナーの「盛り合わせ」のためには、それだけのなべが必要だったらしい。

ジェイムズは、必要とあれば卵をゆでることくらいはできる人間なので、この「盛り合わせ」——何て大げさな——は、いかにも女性的な儀式にすぎないと考えていた。そういうわけで彼は、床にモップをかけた後、犬にならって台所をすり抜け、書斎に入り、腰を下ろして食事が運ばれてくるのを待つことにした。老犬の方は疲れ果てた様子で、すでに暖炉の前でのびていた。かわいそうにと思いながら、ジェイムズはその年寄りを見下ろした。もしエミーが言うように、本当に毎晩この犬に起こされているのだとしたら、確かになんとかせねばならない。実のところ、エミーは大げさに騒いでいるだけなのではないかと彼は考えていた。私自身は犬の声など聞いていない。ひと声も。一度も聞いていない。たしかに自分はいつもよほど深く眠っているのだろう。一日中大学で骨折って働いた後なのだから無理もない。しかし一晩中仮死状態だというわけではない。なぜエミーは自分を起こさないんだ? 起きて犬を外に出してやるのに。そのためのわずかな時間など何でもない。彼の意見では、床の上でおしっこをしないだけでもこの老犬は言うことなしであった。彼は再び「いい子だ」と言った。だが犬はぐっすり眠っていた。

「用意ができたわよ」と言っつて、エミーはこれからキャセロール料理が運ばれてくることを彼に宣告した。彼は大あわてでテーブルの上を片付けて場所を空けた。料理はよい匂いがした。決められた時間に美味しい料理を出すことに関して、彼女が天賦の才を持っていることは間違いない。

食事の後では、ジェイムズの機嫌もよくなっていた。彼に察しがつくかぎりでは、エミーも同じだった。老犬も、時折その口か

らもれる小さな吠え声から判ずるところでは、楽しい夢を見ているようであった。嫌な始まり方をした夜であったが、その後はこれといったことも起こらず、赤ワインを飲んだせいで二人とも眠くなってきた。十時には二人してあくびをし、玄関の時計の最後のひと打ちが鳴り終わると、長い結婚生活からくる暗黙の了解で同時に立ち上がり、戸締りの確認や、暖炉の残り火を消すことや、その他こまごまとした寝支度を始めた。エミーはこれらのことを極めて重要なことと考えていた。

ジェイムズはすべての仕事を彼女とともに甲斐甲斐しく行なった。最後になって彼女は、窓わくの上に並べた鉢植えに遅霜になえて新聞紙をかけた。彼はそこまで付き合う必要はないと考えて、「先が上がっているよ、エミー」と階段の上がり口から呼びかけた。

すると「何か忘れてない、ジェイムズ？」という声が、怒りの翼に乗って彼の後から飛んできた。彼女の憤怒に燃えた眼差しが、彼だけではなく犬をもにらみつけているのを見て、ジェイムズは犬におしっこをさせるために外に連れて行ってやるのを忘れていたことに気づいた。犬は彼が気づかないのをいいことに、先刻の大成功よ再びとばかりに彼の足の間を通り抜け、踊り場にある自分のバスケットの所へ上がってゆこうとしていた。

先ほどエミーがしたように、彼は足で犬を止めようとした。「こら、ダメだぞ！」と彼はふざけるように言って、片手で首輪をつかんで引きもどし、玄関のドアを開けた。「ほら、行ってこい」と彼は言った。「明け方に私たちを起こさないでくれ」

「私たちを？」エミーの視線は厳しかった。彼女の目つきに傷つきながら、ジェイムズは犬が早く出るようお尻を軽くつけた。しかしエミーはす早く外の様子を見て取り、「雨が降っているなんて知らなかったわ」と言って乱暴にドアを閉めた。「犬を外に出してまた手足をビショビショにしてやろうと思っていたなんて言うつもりじゃないでしょうね」犬は困惑してジェイムズを見上げているし、彼は彼でどうしたらよいかわからなかった。

あれほど晴れわたった午後だったのに、急に天気が変わって夜

は雨になるなんて、誰に想像できただろう。今では確かに雨音が聞こえる。ひどい降りだ。排水溝にゴボゴボ流れる水音も聞こえてくる。彼は犬から妻の方に目を移した。「どうしよう？」

「どっちもどっちだわね」とエミーは言った。

「どっちもどっちだつて？」ジェイムズは目を見開いた。「頼むから、偏った物の見方をしないでくれ。私にどうして欲しいと言うんだ？こいつを撃ち殺せとでも言うのかい？」彼はもろろん冗談のつもりで言ったのだが、エミーは冗談とは思っていなかった。

「私はね、あなたと犬のことで話し合って、私がどんな思いをしているか知ってほしかったのよ。たとえばどうしてその犬のせいで私が眠れないかとか。私は犬を非難しているんじゃないの。私がすぐ目が覚めてしまうのはその犬の問題じゃないし、あなたが毎晩死んだように眠っているのも別にあなたが悪いわけじゃないわよ。きつと毎朝仕事に出なくちゃならない男性はたいいていそう考えるんでしょけれど、あいつは女なんだから寝不足したって昼寝して取り返せばいいんだくらいにあなたも思っているんだわ。私は昼寝なんかしたことありません。ねえ、ジェイムズ、ジェイムズ、私はあなたが何か月前に言ったことが頭にこびりついて離れないのよ。あなたはたぶん忘れてしまったでしょうけれど、私には絶対忘れられない。私は心底傷ついたわ。眠れないでいる夢を見たんだろうって、あなたは言ったのよ。ジェイムズ、ねえジェイムズ、どうしてあんなひどいことが言えるの？」

何かそのようなことを言ったのは漠然と記憶していたが、それほど深く彼女を傷つけたとは思ってもみなかった。そんなつもりではなかった、そういうことがあるのをどこかで読んだだけで、そうだと信じていたわけでもない、と彼は説明しようとした。しかし彼女はそれを許さなかった。

「あなたがそう言ったというだけではないわ。あなたがどうしてそう言ったのか、私にはわかるのよ。その方が楽だからでしょう。私が夢を見ていることにしておけば心配しなくてすむからよ。私はね、あなたが言っていることにもその通りな部分がある

ことは認めるわ。夜、何時間も何時間もずっと眠れずにいる人だつて、時にはほんの数は眠りに落ちて、朝起きた時にはどのくらい寝たんだか寝てないんだかわからなくなることだってあるんでしよう。たとえば昨夜だってそうよ。昨夜はわりとすぐに眠れたけれど、寝たと思ったら犬が吠えたような気がしてまた目が覚めたのよ。飛び起きて踊り場に出てみたら、あのいまましい犬はぐっすり眠っているじゃない。こちらに気づくといつもちよつと尻尾を動かしてみせるのに、すっかり疲れていてそれさえしよつとしなかつたわ。私は何を言おうとしているか、わかる？意識と無意識のはざ問みたいものがあることは私だってわかっているのよ。でもあなたの言い方では、まるで私が正直に話していないみたいじゃない。あなたの言い方は——」

「エミー！」

「まだ終わりじゃないわ、ジェイムズ。お願いだから聞いて。いつもちゃんと聞いてくれないんだから。犬が吠え始めるときには、私はとつと目が覚めているということもよくあるんだつて、あなたに何度も話そうとしたのよ。毎回犬のせいで目が覚めるというわけではないのよ。でも暗闇の中で犬を好きなのに走り回らせておこなんで、とんでもないことだわ。だからそうなる、もう私は眠ることなんてできない。日が昇るまで、何が何でも起きていなくちゃいけないのよ。」

日が昇るまで？ジェイムズは眉をしかめた。またしても馬鹿げた言い方だと思つたが、考えてみれば彼女の言っていること全体がそもそも馬鹿げている。「何を言っているんだ、エミー、あの老いばれ犬は、羊を追い回すような年齢なんかとつとに過ぎていくんだよ」

「そう思っているんでしよう。教えてあげるわ、ジェイムズ。やつと日が昇って私が外に出してやると、あの犬どうすると思つう？一目散に野原を走ってゆくよ——ウサギを追いかけるためよ、他に獲物があればまた別だけど。おしっこなんて、まったくしよつとしないわ。私、わかつているのよ。ずっと見てきたんだから。外へ出たがるのもクンクン鳴いて私を起こすのも、おしっ

こをするためじゃないのよ。ひどいのはそれだけじゃないわ。ベッドに戻ってからあなたの目覚まし時計が鳴り出すまでのわずかな時間にたまたま少し眠れたとしても、あの犬が窓の下で吠えてまた中に入れろつて騒ぐのよ。あなたが甘やかしたからだわ、ジェイムズ。あなたはあの犬をとんだ厄介者にしてしまったのよ」

「いい加減にしろ、エミー。私が一日中家にいないことを忘れてるんじゃないか。犬に責任があるとしたら君の方だろう」これだわと一発お見舞いしてやつたし、おそらくこの話も終わらさうと思つたので、ジェイムズは階段を後向きに二段上がったが、エミーの目の中に浮かんだすがすがしい表情を打ち捨ててゆくことはできなかった。

「ねえ、ジェイムズ、私たちどうなつてしまったの？」彼女の声には憎しみのかけらも残っていなかった。「何もかも若い時と同じようにゆくことなんて期待できないのは、私にだってわかっているわ。でもあの頃、お互いに惜しみなく与え合つたものに対して、感謝の気持ちくらいはあつてもいいと思うわ」

ジェイムズは驚きのあまり声も出なかった。このわけのわからない話はいつた何なんだ？彼は結婚の前でも心の問題に興味はなかつたが、結婚後はなおさらそうであつた。しかし、男が自分のもとから離れようとしていると思うと、女はこんな風に話すものなのだろうと彼は感じた。

「ぼくらは同じくらい年のほかの夫婦と何も変わらないよ」と彼は言つた。

「そうかしら。ねえ、ジェイムズ！あなたは若かつた頃、自分たちが結局はほかの人たちと同じようになるんだつて考えて、それで満足できた？」

「結局は、だつて？どういう意味だ？君はぼくのもとから去つてゆくつもりか？それともぼくが君のもとを離れるよう説得しているつもりなのか？」彼は本物の喧嘩が始まつてしまふのかと思つた。だがそうではなかつた。エミーの顔つきは和らぎ、穏やかにこつと答えた。「お互いにもつと優しくしましよつう。相手を思う気持ちをもつと大切にすることもできるはずだわ」

そういうことなら悪くない。ジェイムズはほっと一息ついた。「まあ、いつだってやり直しはできるさ」と言い、彼は手を差しのべて彼女も二階へ上がるようにうながした。彼は急に激しい疲労を感じたが、そのときの踊り場から籐のかごがきしむ音が聞こえてきた。彼らが言い争っているのを幸いに、老犬がこっそりかごの中に収まったのだと気づいて、二人は思わず微笑んだ。ジェイムズは彼女の手をしっかりと握った。彼女は少しためらってから、「あなたに言いたかったことがあるんだけど、明日の朝でもいいわよね」と言った。「もちろん構わんさ」とジェイムズは答えた。

* * *

(後半に続く)

解説

メアリー・ラヴィン (Mary Lavin) は、一九二二年六月一日に生まれ、一九九六年五月二五日に亡くなった、現代アイルランドの女性作家である。二編の長編小説も残しているが、本領は短編小説にあったと言っているだろう。

メアリー・ラヴィンは、両親ともにアイルランド人で、父はトム・ラヴィン (Tom Lavin)、母はノラ・ラヴィン (Nora Lavin) といった。ラヴィンの母親が、ジョイスの妻と同じ名前なのは奇遇である。生まれたのはアメリカのマサチューセッツであったが、子供のうちにアイルランドに帰国し、十歳からはダブリンの北にあるミースに住んだ。ダブリンのユニヴァーシティ・コレッジで学び、ヴァージニア・ウルフ論を書いて博士号を得ている。この博士論文を書いていた頃から創作も始め、作品が活字になったのは、一九三八年に最初の小説「ミス・ホランド」が、『ダブリン・マガジン』に掲載された時であった。本として最初に出版されたのは、短編集『ベクトイヴ橋からの物語』(Tales from Beckett's Bridge, 1942) で、つぎなり一九四三年のジェイムズ・テイ

ト・ブラック賞を受賞した。

三十歳でダブリンの弁護士、ウィリアム・ウォルシュ氏と結婚、四十歳までに三人の子供を持った。この頃までに長編小説二冊と短編集五冊を出版していたが、末子誕生の翌年に夫が他界し、しばらくは生活に追われて創作の暇がなかったようである。

その後、末の子が学校に通うようになって創作にも再び熱が入り、一九五九年と一九六〇年にはグッゲンハイム奨励賞を受け、さらに一九六一年に出版された『大いなる波』その他の物語』では、キャサリン・マンズフィールド賞を受賞し、彼女の名声は不動のものとなった。一九七二年と七三年には、アイルランド文芸家協会 (The Irish Academy of Letters) 会長も務めている。その後、『聖堂』その他の物語 (The Shrine and Other Stories) (一九七七年)、『家族の肖像』その他の物語 (A Family Likeness and Other Stories) (一九八五年)、『カフェにて (In a Café)』(一九九五年)などを出版した。一九九二年にはアイルランド芸術家協会 (Aosdána) から “Saoi” (ゲール語で賢者の意) に選ばれているが、これはアイルランドの芸術家としては大変な名誉であり、アイルランド大統領から授与される終身榮譽号である。サミュエル・ベケットやシェイマス・ヒーニーも選ばれているそうである。彼女は一九九六年に八十三才で亡くなった。

日本での翻訳は、アガサ・クリステイ作品の翻訳で有名な中村妙子氏の訳で、二冊の短編集、『砂の城』(みすず書房、初版一九七五年、新版二〇〇七年)と『ベッカー家の妻たち』(みすず書房、一九七七年)が出版されている。前者は新版が普通に入手出来るが、後者は絶版で古書でしか入手できない。いずれも素晴らしい翻訳であり、後者も新版の発売が望まれるところである。

中村妙子氏の翻訳もまた二冊(短く中編十三作品)だけなので、筆者としても少しずつラヴィンの作品を翻訳してゆきたいと考えて、数年前から『家族の肖像』その他の物語』に収録されている六編の作品を少しずつ翻訳し、『中央英米文学』誌上で発表してきた。既に発表している「貸家 (A House to Let)」(『中央英米文学』第四十一号、中央英米文学会、二〇〇七年十二月)、「家族

の肖像 (A Family Likeness)」（『中央英米文学』第四十二号、中央英米文学会、二〇〇八年十二月）に続き、この「結婚 (A Marriage)」が三作目であるが、いずれも筆者が知る限り日本で初めての翻訳である。テキストは、Mary Lavin, “A Marriage”, *A Family Likeness and Other Stories* (London: Constable, 1985) を用いている。今回は本学紀要に発表することとしたが、短編としてはやや長い作品でもあり、また原作でもはつきりと前半・後半に分かれている作品なので、前半を今年度、後半を来年度の二回に分けて発表することとした。なお、この「解説」は、前述の「貸家」拙訳の末尾に付したものから要点を抄出して用いている。「貸家」の訳文と解説も合わせてご参照いただければ幸いである。